

冠 詞 用 法 の 原 理

安 部 眞 穂

I 序

冠詞の用法は冠詞がつく名詞すなわち「もの」(substance)を話し手がどのように見るかによってきまる。

西洋人が自国語を話すときに無意識に使っている冠詞は彼等の「もの」の見方(conception)をあらわしており、我々も日本語を話すときにテニオワ(助辞)を無意識に使っている。

冠詞はテニオワと同様ネイティブ・スピーカーにとっては用法を意識し理論的に分析することは難しく、またその必要もない。

例えば英語の冠詞に関する古典の著者は Jespersen^(a) も Christophersen^(b) もネイティブ・スピーカーでない。これは外国人こそ他国語の冠詞の用法を理論的に説明するのに適していることを物語っている。唯一の例外はおそらく *Le problème de l'article et sa solution dans la langue française*^(c) (フランス語における冠詞の問題とその解決)の著者 G. Guillaume であろう。なお A. Biard^(d) はフランス語のネイティブ・スピーカーと思われるが、彼の *L'article "the" et les caractéristiques différentielles de son emploi* (厨川文夫訳「定冠詞論」)はフランス語ではなく英語の定冠詞の用法の研究である。日本語には冠詞がないため我々には冠詞の用法はわからないところが多い。英語やフランス語の文法書には「限定された名詞に定冠詞がつき、不特定の「もの」には不定冠詞がつく」と書いてあるが、この説明は問題である。ネイティブ・スピーカーは別として、我々にはそもそも「限定」された、また「不(特)定」な「もの」とはどんな「もの」なのかよく分っていない。これが外国語を書くときに定冠詞を使うべきか、不定冠詞、または無冠詞(ゼロ冠詞)かと我々が迷う理由である。また文法書には固有名詞につく定冠詞や不定冠詞の用法が説明されているが、これは元来ゼロ冠詞である固有名詞の例外的な用法であって冠詞の用法のごくわずかな部分にすぎない。

小論は主として英語とロマンス諸国語の間の冠詞の用法の相違点に着目しつつ西洋人の無意識な「もの」の見方を分析し、一貫した理論をたてようとする一つの試みであるが、読者は西欧語の冠詞に共通の用法が多いことを発見されるであろう。この理論の基礎となっているのは松原秀治先生が「フランス語の冠詞」^(e) (1978年白水社刊14~16頁)で説いておられる「唯一物(Unique)」の理論である。筆者はこれをアイデンティフィケーション(同一物の了解)の理論と解釈し発展させたのである。ロマンス諸国語の間では「もの」の部分的数量をあらわす部分冠詞がフランス語とイタリア語だけにある(後述)など相違点もあるが、だいたい冠詞の用法は共通と云ってよい。英語はロマンス諸国語と比較してゼロ冠詞が多く用いられる。英語の物質名詞と抽象名詞を総称として用いるときにゼロ冠詞となる理由を筆者は、「超唯一物」(Super-Unique)という概念を導入して説明した(後述)。これは「準唯一物」(Semi-Unique)および「普遍物」(Ubiquitous)とともに筆者の造語で何人も述べなかつた理

論である。

西欧語を正しく話し書くためにきわめて重要でありながら従来わが国では殆んど手がつけられていない冠詞用法の体系的理論樹立のたたき台として大方の御批判を仰ぐとともに、その理論的解明の端緒となれば望外の幸である。但し筆者の研究はあくまでも正しく冠詞を使って適確に話し書くという実用的な目的を追求するものであつて単なる理論を目的とするものではないことを強調しておきたい。

Ⅱ 「もの」の見方と分類

会話または書き物のなかで話し手（または筆者以下同様）がさしている「もの」（名詞）が聞き手（または読者以下同様）にわかる（アイデンティファイされる）と考えるか、わからないと考えるかによって話し手は異なった冠詞を使う。冠詞用法の原理はこの話し手と聞き手との間のアイデンティフィケーションにもとづいている。話題の「もの」（名詞）に対する話し手と聞き手の同一物のアイデンティフィケーションという点から見ると、あらゆる「もの」は「唯一物」（Unique）「超唯一物」（Super-Unique）「準唯一物」（Semi-Unique）「普遍物」（Ubiquitous）の四つに分類できる。

(1) 「唯一物」(Unique) 世の中には同じ種類の「もの」が無数に存在しているが、話し手がある（特定）「もの」について語るとき、そのさしている「もの」を聞き手がアイデンティファイできると考える場合話し手はその「もの」に定冠詞をつける。しかるに特定のTPO (Time, Place, Occasion) においては話し手と聞き手のアイデンティフィケーションの対象になる「もの」は唯一つしかない。こういう「もの」が「唯一物」(Unique)である。「唯一物」であること^{シンボル}を示すための標識として定冠詞をつける。「限定」された「もの」は「唯一物」にほかならない。

「唯一物」はこのように多数の同一種類の「もの」のうち聞き手がアイデンティファイできると話し手が考えて定冠詞をつけるのが一般的な場合である。ところがこれとは異なった意味において話し手が問題の「もの」に定冠詞をつける場合がある。それは特定のTPOにおいて問題の「もの」がその場に唯一つしか存在していないことを話し手が聞き手に知らせるために定冠詞をつける場合である。筆者は一般的な場合を「相対的唯一物」、後者の場合を「絶対的唯一物」として区別している。例をあげれば「私は八時に停車場に着いた」Je suis arrivé à la gare à huit heures - I arrived at the station at eight o'clock と云うときこの停車場は話し手と聞き手に分っている停車場であり、停車場は無数にあるが、問題の停車場は唯一つしかない。これが「唯一物」の一般的な場合である。これに反し「私は部屋の緑色の椅子に腰かける」を Je m'assois (m'assieds) sur la chaise dans la chambre - I sit down on the green chair in the room (付属リスト例文 Phrase en example (a)) と云つたとすれば、話し手はその部屋には緑色の椅子は一脚しかないことを聞き手に知らせるために定冠詞をつけたのである。この緑色の椅子は「絶対的唯一物」をあらわしている。何故ならばその部屋に複数の緑色の椅子がありそのうちの一脚に腰かけるのであれば(b) Je m'assois (m'assieds) sur une chaise dans la chambre - I sit down on a green chair in the room と云わなければならない。これらはそれぞれ une des chaises vertes, one of the green chairs (緑色の椅子のうちの一脚)の意味である。

(2) 「超唯一物」(Super-Unique) 「唯一物」とはことなり同種類の「もの」の存在が「そのもの」のほかに考えられない一種一物の唯一物がある。例えばキリスト教徒にとっての神 (Dieu, God)

回教徒にとってのアラーの神 (Allah) や固有名詞 (地名、人名など) は原則としてその存在が一つしか考えられないものである。またこの「もの」は話し手と聞き手にとって「完全な親しさ」 (Perfect familiarity) を感じさせるものでもある (後述参照)。このようなアプリオリの唯一物を筆者は「超唯一物」 (Super-Unique) と名付けたが、「超唯一物」は原則として冠詞をとらない。(後述参照)

(3) 「準唯一物」 (Semi-Unique) 次に聞き手にアイデンティファイできないと話し手が考える特定の「もの」がある。話し手はこの「もの」に不定冠詞をつける。これは話し手の知識や経験によって話し手が知っているもので決して「不定」のものではなく話し手にとっては特定、個別 (particular) のものである。「唯一物」は話し手が聞き手のアイデンティフィケーションを予想している「もの」であるのに対し、この「もの」は聞き手のアイデンティフィケーションを期待できないが特定 (限定) された) の「もの」である。筆者は「唯一物」に準ずるという意味でこういう「もの」を「準唯一物」 (Semi Unique) と名付けた。但し厳密に云うと「準唯一物」は、(イ) 話し手が知識としても体験としても知っているが聞き手に明示しない「もの」と(ロ) 話し手が知識としては知っているが体験としては知らない「もの」がある。(イ) の例は Un homme est venu me voir avec une proposition - A man came to see me with a proposition (ある人がある提案をもって私に逢いに来た) の不定冠詞がついた名詞である。(ロ) の例は Un homme est venu pendant mon absence mais je ne sais pas qui ^éétait cet homme (Un homme = quelque homme, quelqu'un - A man called in my absence, but I do not know who it was (A man = some man, some one) (一人の人が私の留守中に来たが、私はそれが誰だったか知らない) の不定冠詞がついている名詞である。話し手はその人が留守中に訪ねた来たという知識を持っているが、その人を体験にもとづいてアイデンティファイできない。

(4) 「普遍物」 (Ubiquitous) 話し手と聞き手にとってアイデンティフィケーションが問題にならず同一種類のものなら「どれでもよい一つのもの」がある。これは「準唯一物」とは違って無差別、不(特定) (Not particular, indefinite) な「もの」であるので「普遍物」 (Ubiquitous) と名付けた。「普遍物」には不定冠詞がつく。但し筆者はこういう名詞につく不定冠詞は広義の数詞であると考え。なお「普遍物」に広義数詞がつくのは、名詞が主語として総称用法 (後述) で用いられる場合が多い。(但し後述 VI 参照)

III 冠詞の総称用法と指示用法

冠詞の用法は総称用法 (Usage générique - Generic (generalizing) usage) か指示 (形容詞) 用法 (Usage d'adjectif démonstrative - Demonstrative adjective (Determiners) usage) のどちらかである。あらゆる冠詞の用法は定冠詞、不定冠詞 (広義数詞を含む)、ゼロ冠詞のいずれでもどちらかの用法に分類できる。総称用法は「……というもの」はと「もの」の普遍的、抽象的概念を述べる用法であり、指示 (形容詞) 用法は軽い意味で「この、その、あの」と「もの」を指示する用法である。英語の the は that から生じ現在もその意味をもっている。冠詞そのものが (指示) 形容詞の一種でそれ以外の品詞に属するものではない。フランス語の定冠詞はラテン語の指示形容詞が変化した古代フランス語の li (主格) lo, le (対格) が現代フランス語の le になったも

のである。古代フランス語の冠詞は現代の冠詞より指示性が強いものであった。また中世フランス語の *le* には当初指示(限定)用法しかなかったが、十四世紀後半総称用法が生じたのである。

筆者はⅡで述べた四種類の「もの」とこの二つの用法を組合せ、あらゆる冠詞用法の類型(パターン)を網羅した付属リストⅡ Usage des articles d'après une classification des noms (Usage of the articles according to a classification of nouns) (名詞の分類にもとづく冠詞用法)(付属リスト11~14頁)を作成した。あらゆる冠詞(狭義の数詞を除く)の用法は同リストのいずれかの場合に該当するはずである。従って冠詞の選択に迷ったときはこのリストを眺めるか、頭に描き用法の原則にたちかえって考えれば正しい冠詞をえらぶのに役立つと信じている。但し例外のない規則(原則)はないという事実は冠詞用法にもあてはまる。その一例は原則としてゼロ冠詞である固有名詞(「超唯一物」)につく冠詞である。しかしこれは用法のごく一部にすぎないことは前述のとおりである。例外的な用法に気をとられていると一般的用法の原則がわからなくなる。原則が明示されない場合多数の用例は思考を混乱させ実用的見地からは反ってマイナスである。この点我々は特に注意が必要であろう。付属リストⅡの文例の一部は齊藤秀三郎原著、松田福松訳篇「冠詞用法詳解」1953年、吾妻書房 その他から引用させて頂きました。

Ⅳ 冠詞用法の類型

以下付属リストⅡの例文について冠詞用法の類型を説明する。

1. 「唯一物」(Unique) 普通名詞、物質名詞、抽象名詞はいずれも「唯一物」になり得る。(付属リストⅡ参照)

(イ) 普通名詞(総称)

Le chien est un animal fidèle⁽¹⁾—The dog is a faithful animal(1')
(犬は忠実な動物である)では単数の犬にフランス語でも英語でも定冠詞がついている。しかるに複数になると Les chiens sont des animaux fidèles (2) Dogs are faithful animals (2') (犬は忠実な動物である) ではフランス語では複数定冠詞がついているが、英語ではゼロ冠詞になっている。

(指示)

Les chiens du voisin sont fidèles à leurs maître(7) The dogs of the neighbour (The neighbour's dogs) are faithful to their master(7') (隣人の犬はみな主人に忠実である)ではフランス語でも英語でも *les* (複数定冠詞)と *the* がついている。

(ロ) 物質名詞、抽象名詞。

(総称)

フランス語 L'eau est un liquid précieux(3)(水は貴重な液体である)英語 Water is a precious liquid (水は貴重な液体である) フランス語 La vie est courte, mais l'art est éternel(4)(人生は短く芸術は永久である)英語 Life is short but art is eternal (4') (人生は短く芸術は永久である)すなわちフランス語ではいずれも定冠詞がつくのに対し、英語ではいずれもゼロ冠詞である。

(指示)

フランス語 L'eau de la carafe(8) (ビンの水) La vie de la(cette) femme

est triste(10) (その女性の生涯は悲惨である)。英語 The water in the bottle(8') (ビンの水) The life of the (this) woman is sad(10') ではいずれも定冠詞がついている。

(ハ) 物質名詞、抽象名詞(部分的数量をあらわす場合)。フランス語(総称)

On mange du pain(5) (人々はパンを食べる) du pain = (de + le)painで、この le pain はパンという総称であるから du painはパン(というもの)の部分的数量をあらわしている(こういう総称用法の意味をあらわす場合フランス語には on mange le pain とは云わないようである)

(指示)

フランス語 Je mange du pain(11) (私はこのパンの幾らかを食べる)この du pain = (de + le) painで leは「この」の意味の指示用法の定冠詞であるから du painは特定(この)パンの幾らかである。

英語(総称)

We(people) eat bread(5') (我々はパンを食べる)の bread はパン(というもの)の意味である。

(指示)

I eat some bread(11') (= I eat some part of the bread) (私はそのパンの幾らかを食べる)の the breadは特定のパンである。しかるに I drink some coffee in the morning (私は朝コーヒーを幾らか飲む)の coffeeはコーヒー(というもの)(総称)の部分的数量をあらわしている。従って some がついた物質名詞も総称と指示の二つの場合がある。なお(5')の breadは「超唯一物」で「完全な親しさ」(perfect familiarity)をあらわす「もの」のゼロ冠詞である。(後述参照)

ちなみにフランス語では12、13世紀にあらわれた manger del (de + lo) painの形は当時は指示用法のみであったが、前述の定冠詞の総称用法の発生にともない部分冠詞にも指示用法のほか総称用法が生じ現代に至った。(後述参照)

2 「準唯一物」(Semi Unique)

「準唯一物」になる名詞は「数えられる名詞」(Countable noun)である普通名詞だけである。物質名詞や抽象名詞に不定冠詞がついている場合は既に普通名詞に転化しているのである。付属リスト12頁の「準唯一物」の文例は指示用法のみで総称用法がない。「準唯一物」は話し手の特定(particular)の「もの」に対する一方的観念(unilateral conception)をあらわしているので「もの」の普遍的概念をあらわす総称用法は存在しない。

フランス語(指示) Je vais acheter un (des) livres (7) (私はある本を買うでしょう)、英語(指示) I will (shall) buy a (certain) book - I will (shall) buy (certain) books (7') はいずれも話し手には分っているが聞き手にあえて明示していない一冊または数冊の本を意味している。(後述参照)ちなみにスペイン語、ポルトガル語ではそれぞれ Yo voy comprar un(unos) libro(s); Eu vou comprar um(uns) livro(s)と云う。

3 「普遍物」(Ubiquitous)

「普遍物」になることができるのは普通名詞のみである（転化した普通名詞を含む）が、総称用法とともに指示用法もある。付属リストⅡ14頁フランス語（総称）Un chien est un animal fidèle（= Les chiens sont des animaux fidèles）（1）（犬は忠実な動物である）の Un chien（一匹の犬）はすべての犬を代表している。英語 A monkey resembles a man（= Monkeys resemble men）（猿は人間に似ている）の a monkey, a manも同様である。フランス語 Je vais acheter un (des) livre(s)（4）- I will (shall) buy a（= some）book（5'）- I will (shall) buy (some) books（6'）（私は1冊または数冊の本を買うだろう）は不特定の一冊または数冊の本を意味している。「準唯一物」の（7）、（7'）と同じ文章であるが意味が異なるのでこの表現には二通りの意味がある。

なおスペイン語では Yo voy comprar un(os) libro(s)、ポルトガル語では Eu vou comprar um (uns) livro(s) または Eu vou comprar livros と云う。

フランス語の des は古代フランス語の末期にあらわれ元来 de + les = des で「複数の特定物の部分的数量」をあらわす複数であった。しかるに14世紀頃前述の du(de + le) と同様「不特定なものの複数」の意味もあらわすようになった。

4 「超唯一物」(Super-Unique)

「超唯一物」になり得るのは普通名詞、物質名詞、抽象名詞および固有名詞である。総称と指示の二つの用法がある。但し固有名詞は元来は1人しかいない人の名や一つしか存在しない場所（地名）の名称であるから総称用法はなく指示用法のみである。その例として付属リストⅡ12頁にフランス語 Notre - Dame（10）、Paris, Napoleon (Nom propre) 英語 London, Nelson, Mary (Proper noun) が掲げられている。

（総称）

フランス語 Sortir de prison（出獄する）sortir (se lever) de table（3）（食卓を離れる）Professeur de français（フランス語の先生）La vie en rose（6）（バラ色の人生）（Complément circonstanciel）（状況補語）。英語 go to school（通学）bed（就寝）、church（ミサに行く）、sea（水夫になる）；travel by air（航空機旅行）、sea（船の旅行）、etc.（3'）Be at home（在宅）；There's no place like home（4'）（家庭よりよいところはない）（副詞補語）。フランス語 Tenir tête à（抵抗する）faire part（知らせる）avoir faim（空腹を感ずる）avoir chaud, froid（暑い、寒い）avoir lieu（起る）donner raison（道理があるとする）prendre garde（注意する）rendre service（5）（尽くす）（Locution verbale）（動詞句）。英語 Take care（注意する）、take place（起る）、take cold（風邪をひく）、take part（参加する）etc.（5）（Verbal phrases）（動詞句）。このように他動詞の直接目的の名詞を含む熟語では名詞がゼロ冠詞となっていることが多い。フランス語 La parole est d'argent, le silence est d'or（4）（雄弁は銀、沈黙は金）Il est médecin（7）（彼は医者である、cf. He is a doctor）英語 Eloquence is silver, silence is gold（6'）（名詞補語）（Nom attribut ; Predicative noun）

（指示）

フランス語 Père ne dit rien (8) (父は何も云わない) Je cherche tante (père, mere, oncle) (9) (私は叔母(父、母、叔父)をさがしている)。これは現代フランス語ではむしろ例外的な用法であるが父、母、叔父、叔母などは一種の固有名詞と云うべきである。英語 Father came home late, mother sat up late for him (7') (父はおそく帰宅し母はおそくまで座っていた) There was (some) rain in the wind (8') (雨まじりの風であった) She took (some) bread and milk (9') (彼女はパンを食べミルクをのんだ) She has fragile (delicate) health (10) (彼女は病身である) He wanted information, which was useful to him (11') (彼は情報がほしかった。それは自分に有益であった。)

V 「超唯一物」の実相と部分的数量の表現

1. Gustave Guillaume は "Le problème de l'article et sa solution dans la langue française (フランス語における冠詞の問題とその解決) で Nom en puissance (潜在名詞) について述べているが「超唯一物」は Nom en puissance と同じものである。彼の説によれば実体 (substance effective) を有する名詞である Nom en effet (実体名詞。実詞) に対し実体のない観(概)念をあらわすものが Nom en puissance であり、これには冠詞がつかない。冠詞は Nom en puissance を Nom en effet に変える機能をもつものである。固有名詞のように Nom en puissance と Nom en effet のあらわすものが同一であれば冠詞はつかない。すなわち「冠詞の抵抗」が大きい。両者があらわすものの違いが大きくなればなるほど「冠詞の低抗」が小さくなり冠詞が付きやすくなる。

Nom en puissance は「超唯一物」と同様実体がなく単に観(概)念をあらわすものなので実詞に対し「虚詞」である。実体とは何かと云うことは哲学的な問題であるが常識的には実体とは具象的な「もの」のことであって通常名詞は実体をあらわすものである。ポルトガル語で名詞を substantivo と云うがこれは substancia (substance 実体) をあらわすものを意味している。フランス語では昔は具象物にのみ冠詞が付き観(概)念をあらわす「もの」はゼロ冠詞であった。筆者は固有名詞が原則としてゼロ冠詞であるのはそれが実体のない「もの」の単なる名称をあらわしているからであると考ええる。昔は固有名詞のみならず「水」「生命」というような物質名詞と抽象名詞も「その」水、「その」生命という場合(指示用法の場合)にのみ定冠詞が付き一般的観(概)念をあらわす場合(総称用法の場合)はゼロ冠詞であった。それが後に「水というもの」「生命というもの」をあらわす総称用法に定冠詞がつくようになった理由は、これらの「もの」の共通の性質に着目して「唯一物性」を認めた結果であると考えられる。換言すれば従来は普通名詞(具象名詞)に対してのみ認めていた「もの」の実体を物質名詞、および抽象名詞にも認めたのである。しかるに英語では昔も今も物質名詞、抽象名詞を一般的な意味で用いる総称用法の場合にはゼロ冠詞である。これをギョームは古代フランス語の前述のゼロ冠詞の用法がそのまま英語に残っているのであると考えているようである。

筆者の考えでは実体がある「もの」をあらわす普通名詞(具象名詞)は同種のものが多数存在するので、話し手と聞き手の間のアイデンティフィケーションにもとづく「唯一物性」の了解が必要でそのため定冠詞がつく。この定冠詞の指示用法が総称用法にまで拡張された結果、ロマンス諸国語における物質名詞

と抽象名詞の総称用法の定冠詞の使用をもたらした。しかるに一種一物の「もの」は上述のような話し手と聞き手の間のアイデンティフィケーションを必要としないアプリオリに自明の観(概)念をあらわしている。固有名詞およびこれに準ずる「神」や家族の一員などは定冠詞を必要としないが、昔は「水」「生命」など物質名詞、および抽象名詞も一般的観(概)念をあらわす限りにおいては話し手と聞き手の間のアイデンティフィケーションを必要としない「もの」(「超唯一物」)であった。従ってこの用法が残っている英語国民(アングロサクソン族)にとっては物質名詞、および抽象名詞は実体はなくても「超唯一物」性をもつ「もの」であると云える。

A. Biard はアングロサクソン民族は著しく実証的な精神を持っているので物質名詞や抽象名詞があらわしている「茫漠とした概念」は実体として把握できないので英語のこういう名詞には定冠詞がつかないのであると説いている。(d)厨川, 1977, 3~7頁)しかし筆者は「水」や「生命」などの物質名詞、および抽象名詞は英語国民にとってはきわめて明確な普遍的性質を持つ「超唯一物」をあらわしており、「神」や固有名詞と同様な観(概)念で受取られているのであると思う。Jespersenの弟子 Niels Haislund(f)は Jespersen と Christophersen の説を折衷して「親しさ」の段階(Stages of familiarity)説をたてたが、その説によれば「ほぼ完全な親しさ」(quasi perfect familiarity)を有する「もの」は定冠詞をとり「完全な親しさ」(perfect familiarity)を有する「もの」はゼロ冠詞となると述べている。(一色マサ子著「冠詞」97-98頁)「親しさ」は Christophersen が「親しさと単位」説(Familiarity and Unit Theory)(g)で説いたもので、「親しさ」とは語(「もの」をあらわす単語)が持っている意味に聞き手の知識の連想が加わって「ただ一つの判然とした一個の人またはもの」を意味することがわかることを云うのである。従ってこれは話し手と聞き手の間のアイデンティフィケーションにもとづく「唯一物」にはほかならない。これに反し「完全な親しさ」と云うのは「超唯一物」のことである。

前述の動詞句、副詞句、名詞、補語および熟語のなかの名詞がゼロ冠詞であるのは昔これらの名詞が一般的観(概)念をあらわす場合ゼロ冠詞であったことの名残りで古い用法を示しているのである。これらの名詞は物質名詞と抽象名詞だけではない。例えば「起る」という意味の熟語であるフランス語 avoir lieu, 英語 take place, それにスペイン語 tener lugar, ポルトガル語 ter lugar では「場所」を意味する単語は元来普通名詞であるがその実体を失っており、こういう例は無数にある。

島岡茂(h)先生によれば古代フランス語においては非現実な「もの」はゼロ冠詞、現実の「もの」は有冠詞であったが、13世紀に名詞の語尾のsがサイレントになったので、冠詞で単数複数を区別するようになった。その結果冠詞の非現実と現実を区別する機能が失われた。また非現実な「もの」には現実の「もの」と異なり全体と部分の対立はないと説いている。

「超唯一物」がスペイン語やポルトガル語で次の例のように部分的数量をあらわすのは観(概)念というものはゼロ、部分および無限を含み得るからであると考えられる。例えば、スペイン語 Yo tomo café ポルトガル語 Eu tomo café (私はいくらかのコーヒーを飲む)と云うが、この場合フランス語とイタリア語では部分冠詞を用い英語ではsomeをつけるのが普通である。フランス語 Je prends du café イタリア語 Prendo del caffè (私はいくらかのコーヒーをのむ)英語では I drink some coffeeと云う。

ロマンス諸国語の部分冠詞の推移については15頁の付属リストIII Usage de l'article de lan-

gues romaines (ロマンス語冠詞用法) のとおりである。

古代(850-1300)フランス語の Mangier (le) pain (パンを食べる) に対するスペイン語 Comer pan、ポルトガル語 Comer pão は「その」(特定)パンの部分的数量をあらわしていた。その後12~13世紀になるとフランス語で Manger del (de + lo) pain の形がスペイン語 Comer del pan ポルトガル語 Comer do pão とともに現われ、「その」(特定)パンおよび不特定のパン(というもの)双方の部分的数量を意味するようになった。中世(1300~1600)フランス語では del が du となり Manger du pain と云うようになり、これが現代フランス語に至っている。これに反しスペイン語、ポルトガル語ではその後部分冠詞の del, do が姿を消し Comer pan, Comer pão (パンを食べる) という古い形に戻り現代に至っているが、これらの云い方は現代フランス語の Manger du pain と同様「その」(特定)パンおよび不特定のパン(というもの)の部分的数量をあらわしている。

VI 不定冠詞と数詞

前述の普遍物(Ubiquitous)につく不定冠詞(広義数詞)の総称用法に対し狭義の数詞「一つの」がある。狭義の数(形容)詞は冠詞ではなく(指示)形容詞の一種であると考えられる。両者はまぎらわしい場合があるが理論上は区別すべきである。数詞は冠詞ではないので付属リストⅡの冠詞用法の類型には含まれていない。

例。Un⁽¹⁾ chien est un⁽²⁾ animal fidèle - A⁽¹⁾ dog is a^(2') faithful animal
スペイン語 Un^(1'') perro es un^(2'') animal fiel ポルトガル語 Um^(1''') cão e um^(2''')
animal fiel (犬「というもの」は忠実な動物である)において Un⁽¹⁾ A^(1') un^(1'') um^(1''') は
quelque, any, qualquer, qualquer (いずれの)を意味する不定冠詞(広義数詞)の総称用法である。他方 an⁽²⁾ a^(2') un^(2'') um^(2''') は「一つ」を意味する狭義の数詞であって不定冠詞ではない。

他の例をあげると、Je veux un⁽³⁾ livre - I want a^(3') book - Yo quiero un^(3'')
libro - Eu quero um^(3''') livro (私は本が欲しい)の un⁽³⁾ a^(3') un^(3'') um^(3''') は
quelque, any, qualquer, qualquer (いずれかの)の意味を持ち(私はどんな本でもよいが一冊の本が欲しい)ということであり、この場合は不定冠詞(広義数詞)の指示用法である。従って狭義数詞である上記の un⁽²⁾ a^(2') un^(2''), um^(2''') とは区別すべきである。さらに上記の文章が
Je veux un⁽⁴⁾ certain livre - I want a^(4') certain book - Yo quiero (un)
(4'') cierto libro - Eu quero (um)^(4''') certo libro (私はある特定の本が欲しい)の
意味である場合は un⁽⁴⁾ a^(4') un^(4'') um^(4''') は既述のとおり「準唯一物」をあらわす本来の不定冠詞であると考えられる。

参 考 文 献

- (a) Otto Jespersen, "Essentials of English Grammar" 1933, Georges Allen & Unwin Ltd.
- (b) P. Christophersen, "The Articles, A Study of Their Theory and Use in English", 1939,
(一色マサ子訳述「冠詞」1979, 研究社)
- (c) Gustave Guillaume, "Le Problème de l'article e sa solution dans la langue française",
"Réédition avec préface de Roch Valin, 1975, Librairie A - G Nizet, Paris
- (d) A. Biard, 'L'article "the" et les caractéristiques différentielles de son emploi' 1908
(厨川文夫訳「定冠詞論」1977)
- (e) 松原秀治「フランス語の冠詞」1978, 白水社
- (f) O. Jespersen, "A Modern English Grammar on Historical Principles" II, 1909 VII. 12.1 off
(一色マサ子訳述上記(b)の97~98頁)
- (g) 上記(b)「冠詞」63~67頁)
- (h) 島岡茂著「フランス文法の背景」1980, 33~34頁
- (i) 齊藤秀三郎原著、松田福松訳篇英文法研究「冠詞用法詳解」USES OF THE ARTICLES,
1953年, 吾妻書房

付 属 リ ス ト I

Phrase en example

- (a) Je m'assois (m'assieds) sur la chaise vert'e dans la chambre.
(I sit down on the green chair in the room.)
- (b) Je m'assois (m'assieds) sur une chaise vert e dans la chambre.
(I sit down on a green chair in the room.)
- (c) Un homme est venu me voir avec une proposition.
(A man came to see me with a proposition.)
- (d) Un homme est venu pendant mon absence, mais je ne sais pas qui était cet homme.
(un homme = quelque homme, quelqu'un)
(A man called in my absence, but I do not know who it was.)
(A man = some man, someone)
- (e) Un homme peut faire ce qu'il veut du sien.
(A man may do what he likes with his own.)

付属リスト II

Usage des articles d'après une classification des noms
 (Usage of articles according to a classification of nouns)
 (Langues romaines et anglais-Romance Languages and English)

Classification des noms d'après l'identification entre les interlocuteurs (Classification of the nouns according to the identification between the interlocutors)	Usage générique (Généric usage)	Usage d'adjectif démonstratif (Demonstrative adjective usage)
“ Unique ” (Nom en effect) * pour Nom Commun, Nom abstrait et Nom de matière (Common noun, Abstract noun, and Material noun)	(Français) <u>Le chien</u> est un animal fidèle. (1) <u>Les chiens</u> sont des animaux fidèles. (2) <u>L'eau</u> est un liquide précieux. (3) La vie est courte mais l'art est éternel. (4) On mange <u>du pain</u> . (5)	(Français) <u>Le chien</u> du voisin est fidèle à son maître. (6) <u>Les chiens</u> du voisin sont fidèles à leur maître. (7) <u>L'eau</u> de la carafe. (8) Buvez de <u>l'eau de la carafe</u> . (9) La vie de <u>la</u> (cette) femme est triste. (10) Je mange <u>du pain</u> . (11)
	(English) <u>The dog</u> is a faithful animal. (1') <u>Dogs</u> are faithful animals. (2') <u>Water</u> is a precious liquid. (3') <u>Life</u> is short, but art is eternal. (4') We (or people) eat <u>bread</u> . (5')	(English) <u>The dog</u> of the neighbour (The neighbour's dog) is faithful to his master. (6') <u>The dogs</u> of the neighbour (The neighbour's dogs) are faithful to their master. (7') <u>The water</u> in <u>the</u> bottle. (8') Drink (some) water in <u>the</u> bottle. (9') <u>The life</u> of <u>the</u> (this) woman is sad. (10.) I eat (some) <u>bread</u> . (= some part of the bread.) (11')

Classification des noms d'après l'identification entre les interlocuteurs (Classification of the nouns according to the identification between the interlocutors)	Usage générique (Genetic usage)	Usage d'adjectif démonstratif (Demonstrative adjective usage)
<p>“ Super Unique ” (Nom en puissance) ** pour Nom commun Nom propre Nom abstrait Nom de matière (Common noun Proper noun Abstract noun Material noun)</p>	<p>(Français)</p> <p>Je crois en <u>Dieu</u>. (1) Mangier (de) <u>pain</u>. (2) (Ancien français) Sortir de <u>prison</u>, de <u>table</u>. (3) La parole est d'<u>argent</u>, le silence est d'<u>or</u>. (4) (Complément circonstanciel) Tenir <u>tête</u> à, Faire <u>part</u>, Avoir <u>faim</u>, <u>chaud</u>, <u>froid</u>, <u>lieu</u>, Donner <u>raison</u>, Prendre <u>garde</u>, Rendre <u>service</u>. (5) (Locution verbale). Professeur de <u>français</u>; La vie en <u>rose</u>. (6) (Complément de nom) Il est <u>médecin</u>. (7) (Nom attribut)</p>	<p>(Français)</p> <p><u>Père</u> ne dit rien. (8) Je cherche <u>tante</u>. (<u>père</u>, <u>mère</u>, <u>oncle</u> etc.) (9) <u>Notre-Dame</u>. (10) <u>Paris</u>, <u>Napoléon</u>. (11) (Nom propre)</p>
	<p>(English)</p> <p>I believe in <u>god</u>. (1') I eat <u>bread</u>. (2') Go to <u>school</u> <u>bed</u>, <u>church</u>, <u>sea</u> etc. (3') Be <u>at home</u>; There's no place like <u>home</u>. (4') Take <u>care</u>, take <u>place</u>. (5') <u>Eloquence</u> is <u>silver</u>, <u>silence</u> is <u>gold</u>. (6')</p>	<p>(English)</p> <p><u>Father</u> came home late, <u>mother</u> sat up <u>late</u> for him. (7') There was (some) <u>rain</u> in the wind. (8') She took (some) <u>bread</u> and <u>milk</u>. (9') She has fragile (delicate) <u>health</u>. (10') He wanted <u>information</u>, which was useful to him. (11') <u>London</u>, <u>Nelson</u>, <u>Mary</u>. (12') (Proper noun)</p>

Classification des noms d'après l'identification entre les interlocuteurs (Classification of the nouns according to the identification between the interlocutors)	Usage générique (Generic usage)	Usage d'adjectif démonstratif (Demonstrative adjective usage)
"Semi-Unique" pour Nom commun (Common noun)	(Français)	(Français) J'ai rencontré aujourd'hui <u>un</u> étranger. (1) J'ai lu <u>un</u> livre écrit par <u>un</u> Allemand, dont j'ai oublié le nom. (2) <u>Un</u> homme nomme Jacques. (3) En été il faisait <u>une</u> chaleur étouffante ici. (4) Il parle avec <u>une</u> facilité remarquable. (5) C'est <u>une</u> Vénus. (= Elle est belle comme Vénus.) (6) Je vais acheter <u>un</u> (des) livre(s). (7)
	(English)	(English) <u>A</u> man came to see me with <u>a</u> proposition. (1') I know <u>a</u> man who is wise without experience. (2') I see <u>flowers</u> (certain or some flowers) in the garden. (3') Shut <u>the</u> windows, for <u>a</u> dirty dust (<u>a</u> bad smell) will enter the room. (4) The house was painted <u>a</u> bright yellow. (5') He is <u>a</u> Newton. (6') I shall buy <u>a</u> (certain) <u>book(s)</u> . (7')

Classification des noms d'après l'identification entre les interlocuteurs (Classification of the nouns according to the identification between the interlocutors)	Usage générique (Generic usage)	Usage d'adjectif démonstratif (Demonstrative adjective usage)
"Ubiquitous" pour Nom commun (Common noun)	(Français) <u>Un</u> chien est un animal fidèle. (= Les chiens sont des animaux fidèles.) (1) <u>Un</u> homme peut faire ce qu'il veut du sien. (2)	(Français) Donnez-moi <u>une</u> pomme. (3) Je vais acheter <u>un</u> (des) livre(s). (4) Avez-vous <u>des</u> (une nombre quelconque de) frères? (5)
	(English) <u>A</u> monkey resembles <u>a</u> man. (1') (Monkeys resemble men) <u>A</u> man can do what he likes with his own. (2')	(English) I want <u>a</u> (any) book. (3') Give me <u>an</u> (any) apple. (4') I shall buy <u>a</u> (some) book. (5') I shall buy <u>books</u> . (6')

付 属 リ ス ト Ⅲ

Usage de l'article partitif de langues romaines
(Usage of "Article partitif" in Romance languages)

Langue	Latin vulgaire	Français	Español	Portugais
Usage				
Usage générique (Generic usage)	<u>De pane</u> edere	Manger <u>(de) pain</u> (Ancien français 850–1300)	Comer <u>pan</u> (Español arcaïque)	Comer <u>pão</u> (Portugais arcaïque)
Usage d'adjectif démonstratif (Demonstrative adjective usage)		Manger <u>del</u> (de + lo) <u>pain</u> (12-13 siècles)	Comer <u>del</u> <u>pan</u> (Español médiéval)	Comer <u>do</u> <u>pão</u> (Portugais médiéval)
Usage générique et d'adjectif démonstratif (Generic and demonstrative adjective usages)		Manger <u>du pain</u> (Moyen français 1300-1600) Français moderne (1600-)	Comer <u>pan</u> (Español moderne)	Comer <u>pão</u> (Portugais moderne)